

第2回

DTM講座

～楽典的知識について①～

目次

1. 音の種類
2. スケール
3. 長調と短調
4. 特殊なスケール
5. コード
6. コードの種類
7. コード進行
8. 特殊なコード進行（そうでもない）
9. コード内を出していい音
10. 音の進む形
11. 転調
12. 最後に

・・・今度は多いぜ

1. 音の種類

第2回からは音楽に関する知識を説明していきます。

まず、最初に音の種類を説明していきます。

音は **12の音** から構成されており、

低音「**ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ**」高音

となっています。

後は上記の7つに#（シャープ）またはb（フラット）

のついたものがそれぞれあります。

（**#は半音上がり、bは半音下がる**、つまりドの#は、

レのbと同じ事である。**ただし、ミとファ、シとド**

はお互いの音になる。つまり間の音がない）

詳しくは次のページの図.1を参照。

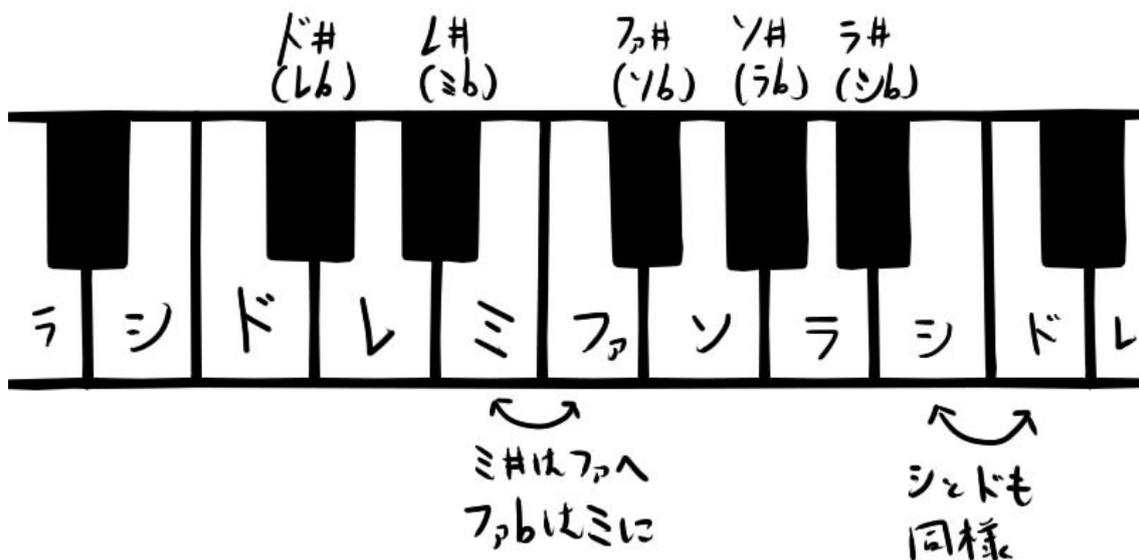


図.1

また、先ほど 12 の音で出来ていると言いましたが、その 12 の音の間にも微妙な違いですがいちおう音があります。

(**デチューン**といいDTMでもその調整は出来ます)

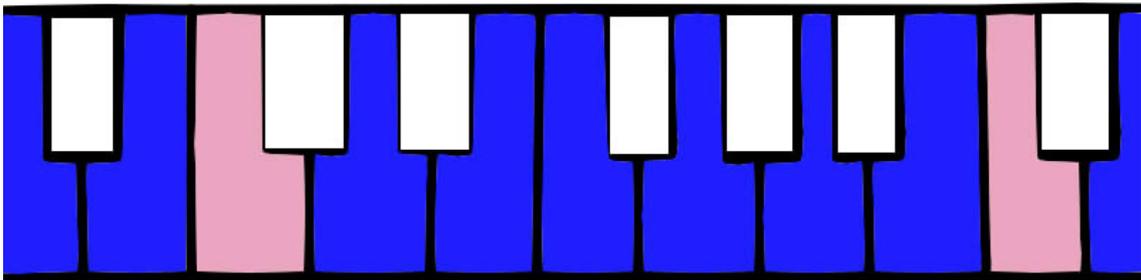
その微妙なズレによって音に広がりや厚みを出したりすることが出来る(だからといって、やればよいというものじゃないです)。

2. スケール

スケールとは、先ほど紹介した音の中で主となる音を決めそこから 12 の音の中で弾く音の構成のものを言います。(スケールの説明の仕方がわからない・・・)

具体例として

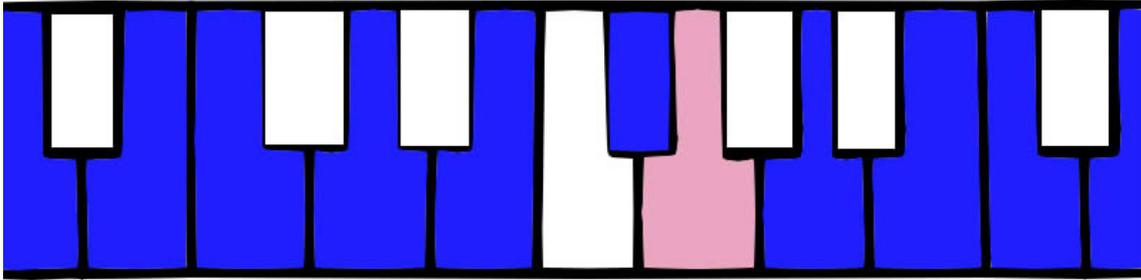
- - 主音
- - 弾いてよい音



ハ長調

■ - 主音

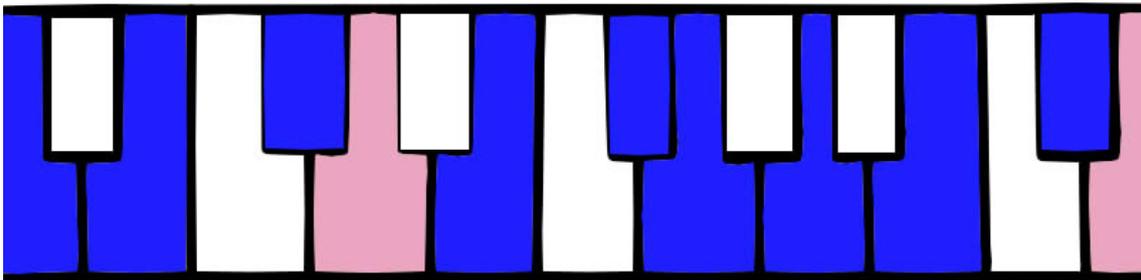
■ - 弾いてよい音



ト長調

■ - 主音

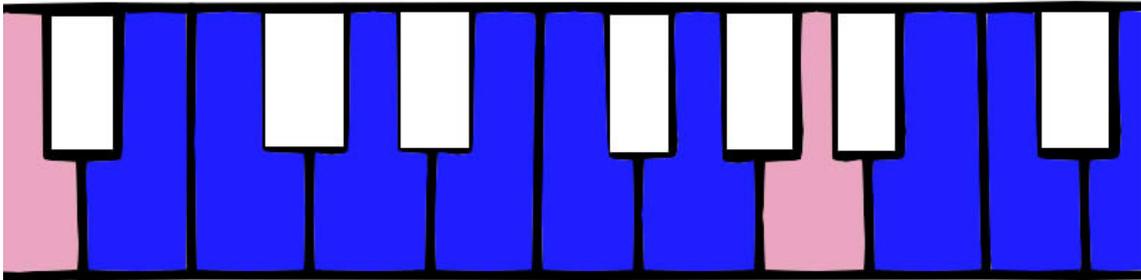
■ - 弾いてよい音



ニ長調

■ - 主音

■ - 弾いてよい音



イ短調

のような物があります。まだ、たくさんありますがそれだと多くなりすぎるので割愛させていただきます。

ちなみに図の下の方に書いてある「～長調」や「～短調」というものは何？と思うかもしれませんが、それについては次の「3.」で説明しますので今はスルーしてもらってかまいません。

ちなみになぜスケールで弾く音が決まっているのかは説明すると、それぞれの音の関係を知る必要があり、本当の音楽知識になるので割愛させていただきます。

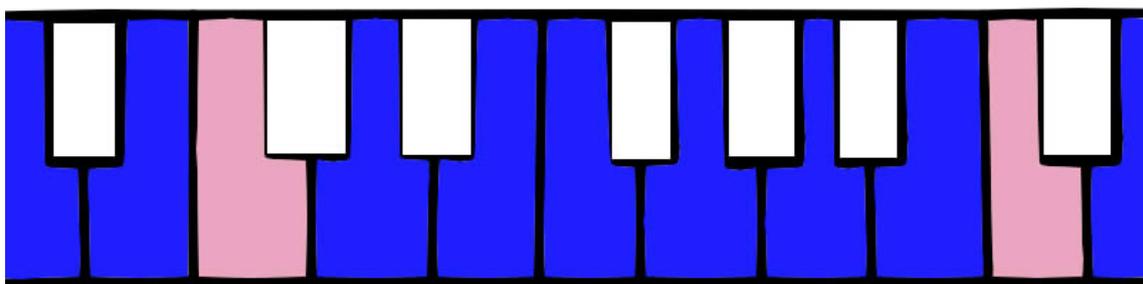
3. 長調と短調

「2.」のほうではスルーといたしました長調と短調についての説明をしていきます。

長調と短調というのは、簡単に説明すると**長調が「明るい感じ」で短調が「暗い感じ」と覚えてもらって結構です。**

スケールにはこの長調と短調が存在しており、主音が同じでもこれが違うだけで全く異なります。

- - 主音
- - 弾いてよい音



ハ長調

それが長調の場合

「全、全、半、全、全、全、半」

短調では

「全、半、全、全、半、全、全」

という法則です。

全というのは「全音」（半音二つ分）、半というのは「半音」のことです。

上記の方法通りに主音を決めてそこから順番に高いほうへ進めばそれでもうその調が出来ます。実際に上の図で確認してみてください。

ね？簡単でしょ。

この法則さえ知ってしまえばもう長調も短調も簡単につくれますね。

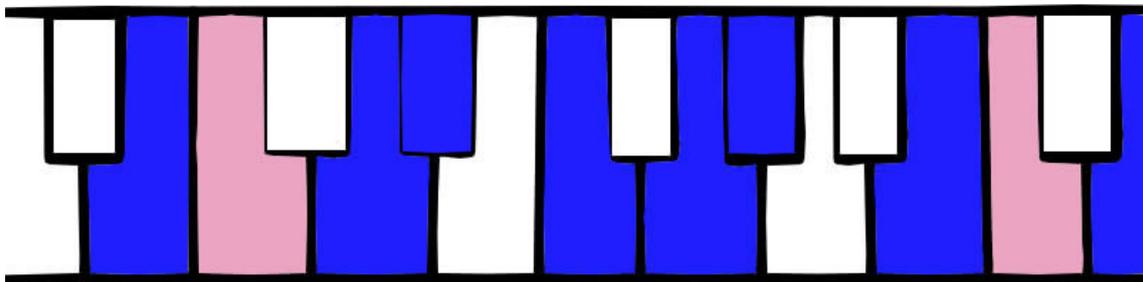
・・・と言いたいところなんですが、実は「長調」に関してはこれでいいのですが、「短調」は「～短調」という同じ名前の短調に図で示したものの他に2種類も形が存在します。それが**和声短音階**と**旋律短音階**とそれぞれ呼ばれています。

(さっきまでやっていたのは自然短音階)

まず和声短音階は

■ - 主音

■ - 弾いてよい音



ハ短調
(和声短音階)

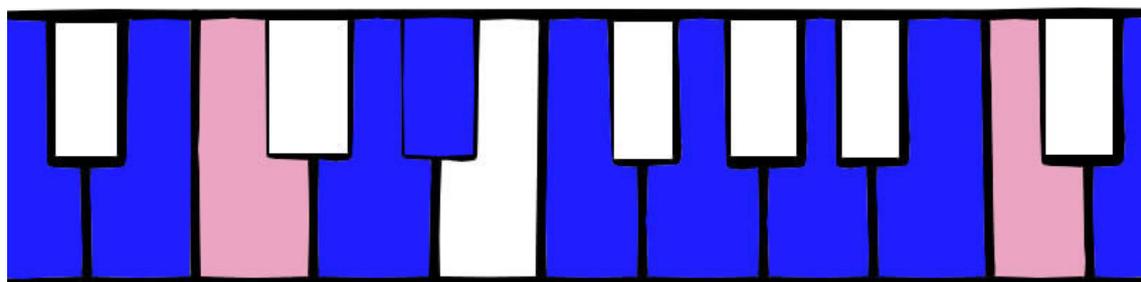
このように、主音（ハ～調は全部「ド」が主音）のひとつ前の音（またはスケールの一番最後の音、この調では「シ」）が今までの自然短音階のハ短調と見ると半音上がっています（自然短音階では「シ♭」、上の図では「シ」になっている）。

これが和声短音階です。つまり、**スケールの最後の音を自然短音階から半音上げたのが和声短音階**なのです。

次に旋律短音階では

■ - 主音

■ - 弾いてよい音



ハ短調 (旋律短音階)

今度は自然短音階と比べてみるとスケールの最後(この調では「シ」)と、最後から二番目の音(この調では「ラ」)も自然短音階から見ると半音上がっています。これが旋律短音階です。

ただし、旋律短音階のこの形は低音から高音に上がって行く時だけで、高音から低音に下がる際は自然短音階と同じ形にしないではいけません。このことに注意しておいてください。

上記のことを知っていれば、自然短音階を見つければ自動的に和声短音階、及び旋律短音階をみつけることが可能となります。

ちなみに**基本的に短調で曲を作る際は、2番目に紹介した「和声短音階」を使うのが安定している**と言われています。
(実際はどの短音階で作っても変にはならないです。)

ですが、最初のうちは考え方が楽な「自然短音階」、もしくは「和声短音階」でつくるのがいいでしょう（旋律短音階は上記のように、考えるのが色々面倒なので）。

※おまけ的な情報ですが、いわゆるゲームなどの戦闘曲（特にボス戦）のような「カッコイイ」曲は、実は短調が多かったりします（というか、カッコイイ感じをだすのは短調が楽、長調だと大変なんです・・・）。

これで「長調と短調」については終了です。

4. 特殊なスケール

今まで説明したので「スケール」について理解していただけたかと思いますが、スケールにはそれぞれ名前がついています。

長調のスケールを「イオニア・スケール」

短調のスケールを「エオリア・スケール」といいます。

そして、現代ではこの二つのスケールしか使用しないのですが、昔はあと5つもの「スケール」が存在していました。

(昔の話だから今は使わないと思うかもしれませんが、結構普通に使われています。)

それぞれ

「ドリア・スケール」

「フリジア・スケール」

「ミクソリディア・スケール」

「リディア・スケール」

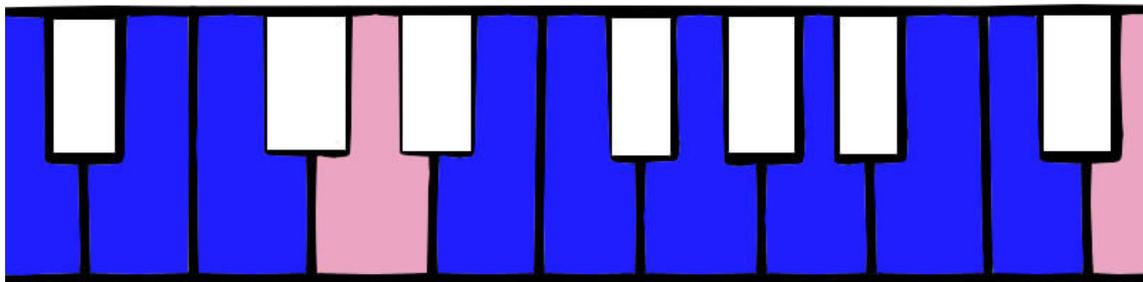
「ロクリア・スケール」

と言います。

この5つの「スケール」の基本的なもの（弾くところが全部白鍵ですむスケール、長調でいう「ハ長調」、短調でいう「イ短調」）を図でしめすと

■ - 主音

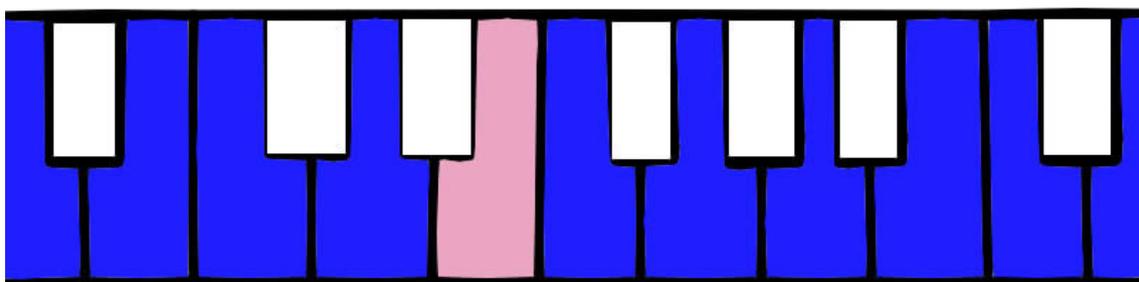
■ - 弾いてよい音



ドリアン・スケール

■ - 主音

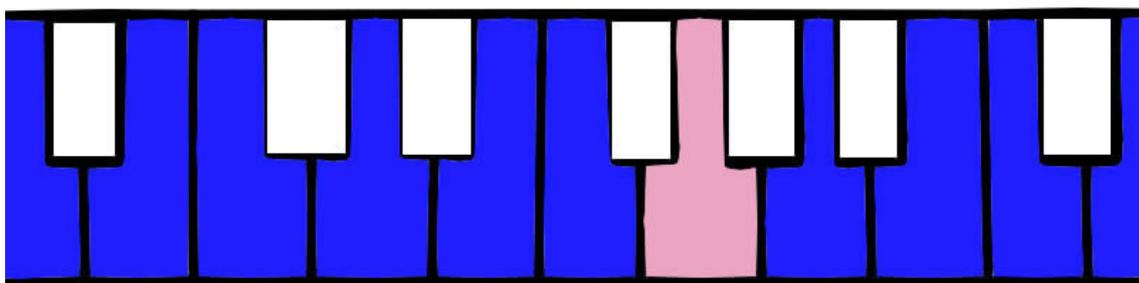
■ - 弾いてよい音



フリジア・スケール

■ - 主音

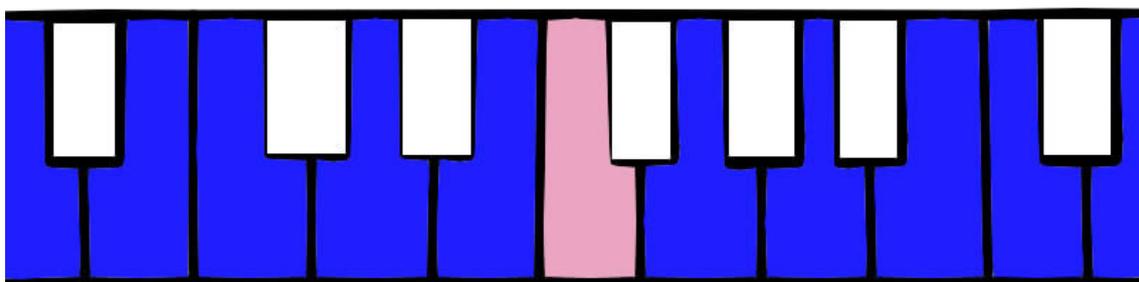
■ - 弾いてよい音



ミクソリディア・スケール

■ - 主音

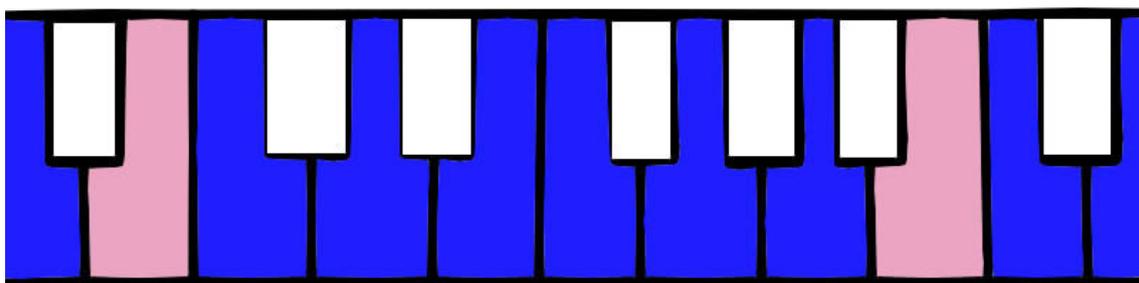
■ - 弾いてよい音



リディア・スケール

■ - 主音

■ - 弾いてよい音



ロクリア・スケール

となります。

図を見ると分かると思いますが、それぞれ弾くのが白鍵で
すむスケールの時の主音が違います。

ちなみに、これらのスケールには長調、短調みたいな言い方
はありません（あるかもしれないけど知りません）。

また、これらのスケールに3.「長調と短調」で説明したよ
うな、「この主音の時どの音を弾いていいのか」という見
つけかたを使用すると

ドリア・スケール

「全、半、全、全、全、半、全」

フリジア・スケール

「半、全、全、全、半、全、全」

ミクソリディア・スケール

「全、全、半、全、全、半、全」

リディア・スケール

「全、全、全、半、全、全、半」

ロクリア・スケール

「半、全、全、半、全、全、全」

となります。でも・・・覚えにくいですよね？

実はどのスケールにも対応するやり方が存在します。

(ちょっと使うのが慣れるまで面倒なんですけどね)

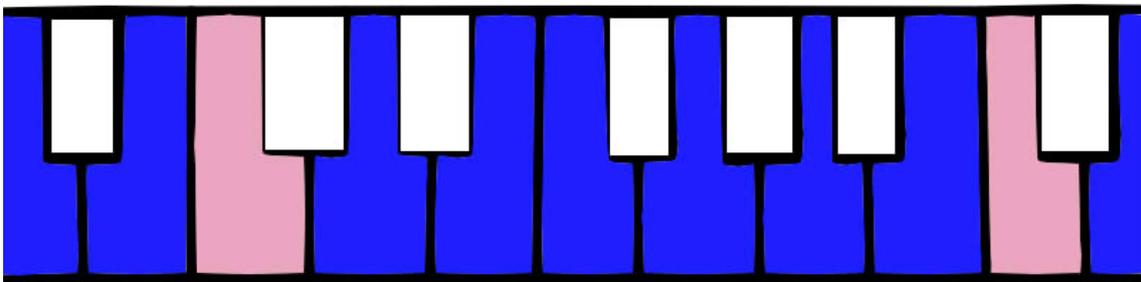
その方法は

「それぞれのスケールで白鍵しか弾かないスケールの主音から数えて5つ上の音を主音としていく」という方法です。

これを一回する度に#の数が一つ増えます。(図を参照)

■ - 主音

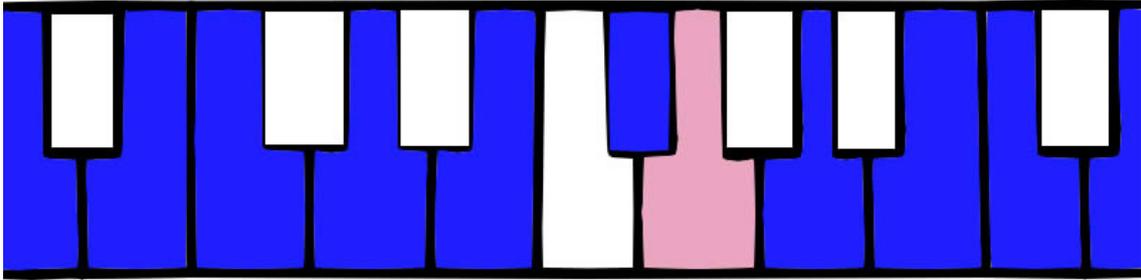
■ - 弾いてよい音



ハ長調

■ - 主音

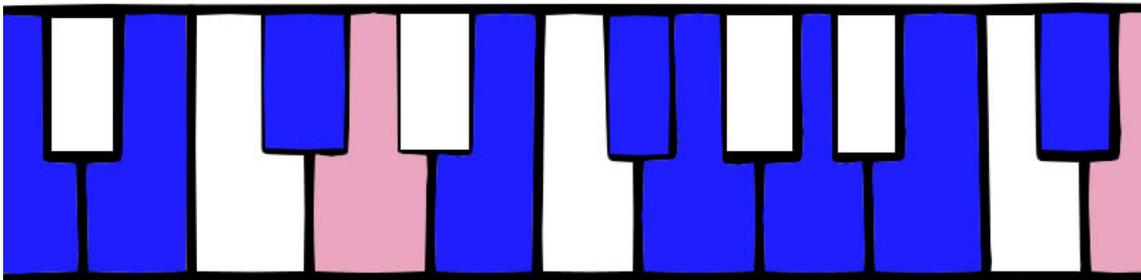
■ - 弾いてよい音



ト長調

■ - 主音

■ - 弾いてよい音



ニ長調

(画像を使いまわしてすいません・・・)

上の図をみてもらうと分かると思うのですが、

まず、長調で白鍵だけですむのは、前述したように「ハ長調」で主音は「ド」です。ここから5つ上の音を見ると

「(ド)、レ、ミ、ファ、(ソ)、ラ、シ」

で、「ソ」が主音になり2個目の図の「ト長調」になります。

そうすると「ファ」が半音上がり「ファ#」になっていることが分かりますね。

次にこのト長調の主音「ソ」から5つ上の音を見ると

「(ソ)、ラ、シ、ド、(レ)、ミ、ファ#」

で、「レ」が主音になり3個目の「ニ長調」になります。

すると今度は「ド」も半音上がり「ド#」になっていることが分かりますね。

#が増える音は決まっています上の方法をする度に

「ファ、ド、ソ、レ、ラ、ミ、シ」

の順番が増えていきます(これはどの「スケール」でも共通)。

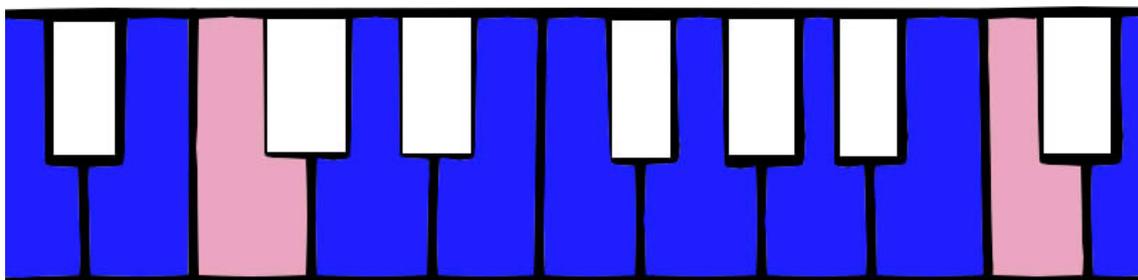
ちなみにこれは#が増えていくのを見つける方法です。

bが増えていくのをでは#でやったことの逆

「それぞれのスケールで白鍵しか弾かないスケールの主音から数えて5つ下の音を主音としていく」をします。

もちろんこのことを一回する度にbの数が一つずつ増えます。(図を参照)

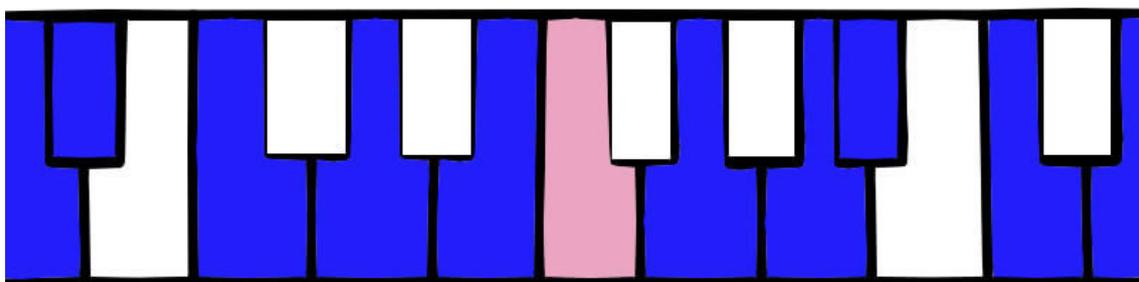
- - 主音
- - 弾いてよい音



ハ長調

■ - 主音

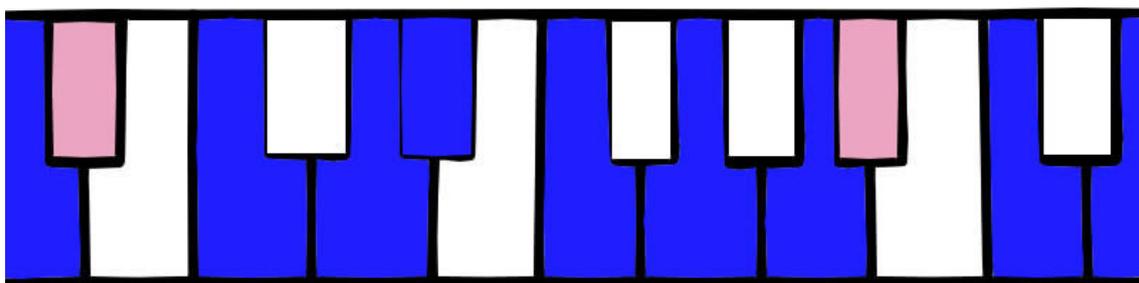
■ - 弾いてよい音



^ 長調

■ - 主音

■ - 弾いてよい音



変ロ長調

今度は「ハ長調」の主音「ド」から数えて5つ下の音

「レ、ミ、(ファ)、ソ、ラ、シ、(ド)」

で、「ファ」が主音の2個目の図、「ヘ長調」となります。

そうすると「シ」が半音下がり「シ \flat 」となっていますね。

次に「ファ」から数えて5つ下の音

「ソ、ラ、(シ \flat)、ド、レ、ミ、(ファ)」

で、「シ \flat 」が主音の3個目の図、「変口長調」となります。

(この「変」というのは主音が \flat のついたものという意味です。ちなみに \sharp がついたものは嬰(えい)がつきます。)

そうすると、「ミ」も半音下がり「ミ \flat 」となっていますね。

\flat も増える順番は決まっており(というかこれも \sharp の逆)で

「シ、ミ、ラ、レ、ソ、ド、ファ」

の順番で増えていきます。

この二つの法則さえ知っていればどの「スケール」であって

も簡単に弾いていい音が簡単に探せます。

雑記てきなもの

今回の「楽典的知識」は説明も難しく図を多く使う必要があり、一回で書くと長くなってしまいますので何回かに分けていきます（多分三～四回かな？）。

また今回、なんども書きました「スケール」で弾いていい音というのは、そこさえ弾けば変に聞こえないようにしやすいというものであって、別に弾いちゃいけない音を弾いたりすることもあります（ジャズとかは、そういうことの集まりです）。

なので、私の知識で書いていることが全てではないので、自分が良いと思ったらここで書いていることに反していてもやった方がいいと思います。

（実際、音楽は芸術の分野であいまいなものなんです。）

なので、知識に縛られずに自由にやっていきましょう。

by.....巫女好きの人